

マートン「社会構造とアノミー」論の再考察

村 上 直 之

Rethinking of Merton's Anomie Theory

Naoyuki Murakami

序

この小論の主な意図は、R. K. Merton のアノミー論の基底にある視座構造を、1930年代後半アメリカ社会学が当時置かれていた問題状況との関連において、彼の当初の問題意識のいわば再現を通して解明することにある。とともに、その理論の背後にある基本仮説を照射し、彼の社会秩序観を探ることにある。

周知のように、1938年、彼は『アメリカ社会学評論』に発表した「社会構造とアノミー¹⁾」論文において、E. Durkheim の記述的でアド・ホックなアノミー概念を社会=文化構造との関連において再定義することによって、逸脱行動論を中心とする社会問題分析のための体系的な基礎理論を提出した。1920年代初め、アノミーの概念は R. E. Park と E. W. Burgess (1921) によってアメリカ社会学へ紹介され²⁾、その終りに P. A. Sorokin (1928) によって自殺率研究³⁾に、また1930年代初めには E. Mayo (1933) によって産業都市の社会解体⁴⁾の研究に適用されていたが、この時 Merton によってはじめて記述的方法の段階から分析的方法の段階へと飛躍するにいたった。この飛躍がいかにしておこなわれたか、彼自身は次のように語っている。

「1930年代の終盤、社会学理論自体の内的発展によってほとんど全面的な変化が生じた。社会現象の狭い領域に限定されない諸概念を総合することの重要性にしだいに気づいた社会学者達は、狭い範囲の現象を組立てるために導入されてはいたがより広範囲な適用の可能な諸概念から、しだいに拡大的な意味内容を抽出する準備をおこなっていた。1937年までに T. Parsons はその大著『社会的行為の構造』においてアノミーの概念を摺り、詳細かつ広範な検討を加える準備をしていた。私がアノミーの主要因およびアノミーへの反応行動に関する体系的で概念的な類型化という理論的問題に専心したのは、Sorokin と Parsons によって導かれたこうした社会学理論のローカルな雰囲気の中においてであった⁵⁾。」

Merton のアノミー論の分析枠組である「目的=手段」図式が Parsons の主意主義的社会学理論の「目的・状況(手段と条件)・規範」という行為分析の基本単位から導かれ⁶⁾、また彼の理論の中心テーマをなす社会変動への関心が Sorokin によって触発されたであろうことは想像にかたくない⁷⁾。だが、私がここで強く関心を寄せるのはアノミー論の系譜づけではなく、「社会学理論のローカルな雰囲気」という言葉のもつ意味についてである。たしかに1930年代後半はアメリカ機能主義社会学の黎明期であり、Merton が語る「社会学理論自体の内的発展」とはこうした事情を示唆する言葉であろう。また「社会学理論のローカルな雰囲気」という言葉には当時のアメリカ社会学の中心であったシカゴ学派に対して彼らの置かれていた周辺の位置が語られていよう。そしてそこには、アノミー論が自由な密室的雰囲気の中で書かれたというニュアン

スが含まれているようである。けれど私は、この「ローカルな雰囲気」という言葉の中にもう一つ別の意味を見出すのである。

しばしば、いかなる社会学理論も理論家自身の経験であると同時に特定の歴史的現実の所産であると言われる。E. Durkheim の『社会的分業論』(1893)⁸⁾と『自殺論』(1897)⁹⁾がヨーロッパ1890年代の恐慌の直後に出版されたと同じように、Merton の「社会構造とアノミー」もまた、1929年から1933年のアメリカ大恐慌の後、いくらか小康状態を回復したとはいえそれにつづく1937年の恐慌の最中に書かれている。とすれば、アノミー論が書かれた当時の時代状況との関連において彼の問題意識を探り、彼のアプローチを暗黙のうちに規定していた歴史的=社会的基盤が明らかにされなければならないということになるだろう。たとえば、真田是(1965)はアノミー理論が資本主義の破局においてあらわれるブルジョワジーの自己認識であり、「帝国主義的な思想統制にうまく移行しようとする布石としての大げさな社会認識である」と述べている¹⁰⁾。また、W. Simon と J. H. Gagnon (1976)によれば、「Merton の説明図式と暗黙のアプローチは1930年代終りの大不況からの一時的回復期という歴史的文化的制約の刻印を受けており、(中略)彼が、広範で多様に承認を受けた文化的目標を達成するための社会的に構造化された手段が一般に差異的に(differentially)稀少であることが資本主義社会のおそらく永遠の常態であろうと仮定しているのも驚くに価しない¹¹⁾」という。前者は理論の由ってきたる経済=政治的基盤を、後者は歴史=文化的基盤を探ることによって、ともに理論と歴史的現実との帰属関係を論じている。両者はともに、Merton 自身が当時の危機的状況に深く巻き込まれていたという想定の上に考察をおこなっているわけである。だが、果してそうであったろうか。アノミー論が「ブルジョワジーの大げさな社会認識」であるか否かはともかく¹²⁾、資本主義社会の常態を「稀少性の社会 society of scarcity¹³⁾」とイメージするのに緊迫した経済不況や危機意識は必ずしも必要ではないであろう。ひとは零和ゲームであれ他のどのようなゲームであれ、「稀少性のゲーム」を娯楽としておこなうのであるし、自分が置かれた特定の時代状況を少なくとも意識生活の上でトランプの厄札のようにパスすることもできよう。Merton のアノミー論文のどの個所にも経済恐慌の不安の影などいささかも兆してはいない。たしかにアノミーという語は、それを語り、また聞く者の不安感情や危機感からその内包が賦活されるといった類いの言葉である。しかし、すでに半世紀前 Durkheim という先人によって「産業社会の慢性的な無規制状態」が「アノミー問題」として提起されている以上、彼にとって取組むべき課題は自らが置かれた同時代のアノミー状況に煩わされることなく、この概念の意味内容を距離をもって分析し、一つの論理整合的な理論へと洗練することにあつたとも言えよう¹⁴⁾。

要するに、私は、Merton 自身が語る「社会学理論のローカルな雰囲気」という言葉の中に、こうした同時代の歴史的現実からの彼自身の隔たりという意味を当時黎明期の機能主義社会学が置かれていた周縁的な位置という意味とともにいわば二重に読み取ろうと思うのである。このことは、彼のアノミー論が彼自ら示唆するように「社会学理論自体の内的発展」にしたがって自由な密室的雰囲気の中で書かれたということの意味していない。むしろ私は、彼が時代の状況に対して距離をもって自由であったがゆえに、当時のセントラルな社会学的問題状況に対してひそかに確執を醸し、その状況の核心を鋭敏に感受することによって、個別的で問題解決的であると同時に一般的で体系的な社会問題に関するいわゆる「中範囲の理論」を構築しえたのであらうと推察するのである。彼のアノミー論は表面的にはともかく、きわめてポレミックな理論と思われるからである。それでは、彼の確執は、1930年代後半のアメリカ社会学のいかなる問題状況に対して向けら

れていたのだろうか。

1. 1930年代後半の知的状況

1930年代後半にアメリカ社会学が経験した特筆すべき状況として挙げなければならないのは、社会科学と精神医学という二つの学問領域の知的交流の状況であり、その過程で模索された理論的統合の試みである。この試みには二つの流れがあり、その一つは「社会解体」と「精神障害」というテーマをめぐって R. Bain, E. Burgess, W. I. Thomas, L. S. Cottrell, C. R. Shaw, J. Dollard 等を中心とするアメリカ中西部の社会学者のコミュニティ研究や生活史研究等の経験的調査法と F. Alexander, E. Mayo, H. S. Sullivan, W. Healy, A. Meyer 等の精神医学者の心理学的・治療的方法を接合しようとしたいわゆる社会精神医学 Social Psychiatry あるいは社会分析 Socioanalysis の流れである。¹⁵⁾他の一つは、後に40年代になって「文化とパーソナリティ学派」と称されるにいたる E. Sapir, R. Benedict, M. Mead, C. Du-Bois, R. Linton 等の文化人類学者と、K. Horney, E. Fromm, A. Kardiner, H. S. Sullivan 等の精神医学者による、パーソナリティ形成に及ぼす文化的社会的影響に関する協同研究の流れである。¹⁶⁾

まず、社会学と精神医学のこうした理論統合の試みを生みだすにいたった歴史＝社会的背景として、1930年代の社会学の実践部門であるソーシャル・ワークと精神医療の編成過程について触れなければならない。1917年に M. E. Richmond が精神医学者 A. Meyer の協力下に体系化したソーシャル・ワークは、20年代には「精神科学者とソーシャル・ワーカーの知的統合¹⁷⁾」状況を生み出し、アメリカ社会の中で精神医療的活動が人間関係の調整を目的とするソーシャル・ケース・ワークとして広範におこなわれていた。1930年代になると、こうした個別的で治療的なケース・ワークの原理は、ニューディール政策の一環としての国家的規模による社会福祉原理への統合の要請にしたがって、また1933年になってアメリカ精神医学会の中に市民権を得た精神分析と集団精神療法の導入によって、ソーシャル・グループ・ワークとして再編された。既に20年代から急激に進行していたアメリカ社会の都市型生活様式への変化、核家族化、個人の原子化による地域解体の現象は、経済恐慌下の失業・生活苦・病氣・ノイローゼ・自殺・犯罪・非行等の社会問題をより一層深刻化させ、地域社会の再統合は急務となっていた。ソーシャル・ワーカー達はこのような解決課題を担って「社会的に覚醒しかつ知的な市民集団の創出への寄与¹⁸⁾」をめざして活動をおこなっていたのである。こうした実践の現場からの要請の下に、社会学者および精神分析学者を含めた精神医学者は、共同体秩序の再編成という課題を担って、社会の精神分析学的アプローチと精神医療の社会的アプローチを模索していたのであった¹⁹⁾。

文化人類学と精神分析の出会いもまた1920年代後半からのほぼ同じ歴史的背景の下におこなわれていた。この出会いは、社会学と精神医学のそれが主として政治＝社会的基盤の上になされたのに対して、いわゆるアスピリン・エイジと言われる当時のアメリカ市民達の間に巻き起った精神分析のブームに由来すると言われる²⁰⁾。文化人類学者はフィールド・ワークで収集した種々の未開種族の文化を心理学的なパターンに分類することによって精神分析学の影響を受けると同時に、未開人における異常行動の調査資料を提出することによって、「正常」と「異常」の判断基準がその人間の属する「一つの全体としての文化」(Sapir, 1932)によって決定されることを精神分析学者に教えた²¹⁾。こうした相互影響を通じてパーソナリティ形成に及ぼす文化的社会的要因の分析がおこなわれるにいたったのである。この文化人類学と精神分析の知的統合によって当時の学問的状況に投げられた重要なテーマとして「協同と競争行動の文化的条件」に関する諸

研究を挙げなければならない。協同と競争という二つのタイプの行動様式の社会的・経済的・歴史的要因をめぐって文献研究・調査研究を含めた比較文化論的研究がおこなわれたが、これはアメリカの競争文化に対する暗黙の批判と人間的な協同原理の模索とをともに含んでいたと言えよう²²⁾。

一方では「社会解体と精神障害」論という実践的問題を、もう一方では「文化類型と性格類型」論という理論的問題を、それぞれ中心に取組んでいた社会科学と精神医学の二つの知的交流、その二つの流れのいわば合流地帯（その共通テーマは人間的かつ自然な共同体の発見と創出という問題にあった）で実践的にも理論的にも多大な活動をおこなったのは、後に Neo Freudian と称されるにいたる H. S. Sullivan, K. Horney 等の精神医学者であった。特に E. Fromm と並んで Neo Freudians の指導者と目される Horney は「文化と神経症」というテーマの下に精神分析の新しい方法論構築のための基礎作業に取組むとともに、当時のアメリカに対する鋭い文明批判を展開しつつあった。1930年代後半アメリカ社会学が置かれていた学問的状况を、一面から眺めるなら、「精神分析の社会科学への侵入²³⁾」と捉えることも可能であろう。1938年、Merton が「社会構造とアノミー」を発表するに際して確執を醸していたのはこのような状況に対してではなかっただろうか。そして彼の確執は、他の誰にもまして社会科学と精神医学の二つの知的結合の焦点にいた Horney に向けられていたのではなかったか。いやむしろ彼のアノミー論の認識図式自体が Horney の「文化と神経症」論を契機として、その批判的再構成によって成立したのではなかっただろうか。第二、第三節では、これらの問いの由ってきたるゆえんを、アノミー論の理論構成自体の検討によって明らかにするつもりである。

2. Freud 批判への基礎視角

「社会構造とアノミー」論は、Freud 理論が逸脱原因論として不適当であるという批判をもって始められている。Merton によれば、当時の社会学理論には、社会統制が人間の本性である生物学的衝動に対する「衝動管理のための機構 device for impulse management」に他ならず、逸脱行動はそうした不合理な条件づけに対する生物学的衝動による破壊行動であり、同調行動は功利的打算の結果であるとする Freud 的見解がはびこっているという²⁴⁾。彼によれば、Freud 説は規範的行動からの逸脱を生じさせる非生物学的条件を説明しえない。逸脱行動が「正常」な行動と目しうような諸条件を生じさせる社会構造の特定局面の解明こそ自らの論の目的であり、Freud の見解を逸脱原因論に関する「原罪」説とすれば、自らの見解は「環境」説であるという。こうした両者の見地の相違は、しかし、これを単純に生物学的原因論と社会学的原因論との相違と見なすことは誤りであろう。逸脱原因論はその論の本質からして有責性の所在に関するインプリケーションを含み、Freud 説には逸脱行動の原因と責任を人間の敵意の表出から発生したそれ自体悪である社会秩序に帰せしめようとする含意がある。Merton の Freud 批判の要は、その功利主義的社会観、とりわけ社会秩序に関するペシミスティックな見解に対する批判という点にあり、Freud 後期の、そしてその後 H. Marcuse (1956)²⁵⁾ に継承されるにいたる現代文明社会に対する全面否定的見解をしりぞけ、逸脱現象の原因を「社会構造の特定局面 certain phase²⁶⁾」に帰着させるという、いわば社会的状況因論の提示というところにあった。この点から見るならば、Freud と Merton の相違は逸脱現象の社会的原因論の二つの立場の対立を代表していると言えよう。これは根本的に重要な点である。というのは、この二つの立場の相違は、一つには両者の基本的な視座構造の相違であるとともに、より深層においては互いに相容れることの

できない社会秩序観の問題だからである。Freud の全否定的な社会秩序観に対して、Merton のアノミー論の背後にある社会秩序観の認識構造自体の解明が重要な課題となる。だが、その前に彼のこうした逸脱原因論の基本的な視座構造の成立の契機を探ってみよう。

彼は「社会構造とアノミー」論の最後の註記において、自らの主要関心が社会の規制的構造(regulatory structure)の崩壊の社会=文化的側面にあるのに対して、その同一過程の心理学的解明を論じたものとして K. Horney が前年に著した『現代の神経症的性格』(1937)を挙げ、両者の相補的關係を示唆している²⁷⁾。彼は後に1949年、そのアノミー論修正論文において、Horney の同書を「厳密に Freud 的な論²⁸⁾」と述べて両者の相補性についての言及を取下げている。だが、1930年代後半におこなわれた Horney の Freud 批判がもたらした Freud から Neo Freudian への神経症論の基本的な視座構造の転換の意義を考える時、彼女の理論を Freud のそれと全く同列に論じるのは不穏当ではなからうか。なぜなら、Horney の神経症の病因論は、後に見るように、Merton のアノミー論に先行するところの一種の逸脱行動の社会的状況因論であり、その Freud 批判における基本的な視座構造は両者ともに同一だからである。

『現代の神経症的性格』刊行の前年、Horney は1936年『アメリカ社会学評論』掲載の「文化と神経症」論文において、神経症論の基礎視角を次のように提示している。彼女はまず、症状論から性格論への視座転換を次のように説く。神経症の症状は葛藤する性格特性の発現の結果であり、真の病因は性格障害に求められなければならない。そして、神経症の性格構造がどのような文化過程(cultural process)によって形成されるかが「正常」な性格形成の場合と本質的に同じ様に解明されなければならない。そのためには、「文化と神経症」の関係についての Freud の見解が修正されなければならない、と²⁹⁾。彼女の Freud 批判の論点は次の二つである。その第一点は、文化の発達が人間の生物学的衝動の抑制の発展と正比例であり、神経症が人類の文化発達の代価であるとする彼の仮説は、歴史的および人類学的な諸発見事実によって支持されない。第二点は、神経症は特定の本能的衝動の抑圧の性質に基づくというより、個人に課された「文化の諸要求の間の葛藤³⁰⁾」によって惹き起された障害に基づくものであるという点である。第一点については、Merton が Freud の見解を「原罪」説と批判したと同様に、Horney が彼の全否定的な文明批判に対して異議を唱えたものであることは言うまでもない。Merton が「社会統制」と「生物学的衝動」を対立させて考える社会学理論の Freud 的見解の批判から論を起しているのとまったく同様に、「文化」と「本能」とを二元論的に対立させる Freud の機械論的思考の否認こそ、Horney の唱えた精神分析理論の基本的な見解の一つであった。この論点の背後には、人間行動の「正常」と「異常」の判断基準がその人間の所属する社会の文化類型によって決定される相対的な基準であるという、文化人類学者による発見事実からの影響が見られよう。さて、Merton の逸脱原因論と Horney の神経症病因論の基礎視角の同一性は第二の論点により明確に見出される。Horney は神経症の原因を患者が属する社会の文化的葛藤あるいは文化的矛盾(cultural contradiction)³¹⁾に起因するものとみなしているが、これに対して Merton は、逸脱行動の原因を逸脱者が置かれた社会のアノミー状況の圧力に求める。彼によれば、このアノミーという概念は文化的混沌(cultural chaos)³²⁾のことである。Freud が抑圧機構としての文明社会全体に逸脱行動の淵源を探ったのに対して、Horney と Merton は、一方は「文化的葛藤」といい、他方は「アノミー」といい、その状況規定こそ異なっているが、ともに一社会の特定の文化状況に病因なり原因を求めているのである。

Merton と Horney のこのような Freud 批判を通じての視座構造の基本的な同一性は単にそ

れだけのことであろうか。たしかに、Horney の「文化と神経症」が病因論という個別具体的な特殊理論であるのに対して、Merton の「社会構造とアノミー」論は逸脱行動の原因に関する一般理論であるという相違がある。また、Horney の理論の核心は神経症的性格構造自体の解明にあって、「文化的葛藤」状況はそうした性格の形成要因として、つまり状況分析上の問題としてのみ取上げられている。それに対して、Merton の理論の中心テーマは逸脱行動を発生させる社会構造の諸構成要素の分析にあって性格構造に関する言及はここでは皆無である³³⁾。だが、問題は次の点にある。Horney が「文化的葛藤」あるいは「文化的矛盾」という用語で定義した「状況³⁴⁾」と、Merton が「アノミー」あるいは「文化的混沌」という概念規定を与えた状況とは、それぞれいかなる状況であったかという問題である。

3. アノミー論の分析図式

Merton のアノミー論は二部構成からなるきわめて簡潔な論理構造によって展開されている。第一段階において、社会＝文化構造の二側面、文化的目標とその達成のための制度的手段（技術的手段と区別された制度的規範）という構成要素が析出され、両者間の整合・不整合の関係が論じられる。これは社会構造の統合度の問題であり、この整合・不整合の関係から社会秩序の三つの理想型が導かれる。第一に文化的目標の強調度が制度的手段のそれに優越する社会（集団）類型、そして第二に制度的手段の強調度が文化的目標のそれに優越する社会（集団）類型が分類され、どちらの類型も文化的に不統合（cultural malintegration）であり、特に前者の場合の不統合状態がアノミーと規定されるのである。そして、二つの類型の中間に二要素の強調度が均衡する安定した社会（集団）類型が理念的に存在することになる³⁵⁾。Merton のこうした社会（集団）類型論が、当時の文化人類学による「文化類型 cultural patterning」論の一つの variation であることは言うまでもない。（第三の社会類型に Merton が自らの理想的社会秩序の観念を仮託していることがうかがえるが、この問題は後節において論じる。）

彼は自らの主要な関心が第一のアノミックな社会（集団）類型にあり、アメリカ社会がこの類型に分類される社会であるとして、その理由を次のように述べる。成功＝シンボル（文化的目標）として富の蓄積の極度な強調は制度的に規制された蓄財方法（制度的手段）の完全に効果的な制御に抵触する。なぜなら、貨幣という富のもつその抽象的でインパーソナルな性質はその獲得手段が何であれ、同じ財やサービスの購買を可能にし、また都市文化の匿名性によってその富自体が地位のシンボルとなることが可能だからである³⁶⁾。

理論構成の第二段階は、社会（集団）内の諸個人の適応様式の類型論である。文化構造の二要素それぞれに対する個人の「受容」ないし「拒否」の組合せによって著名な「同調」「改変」「儀礼主義」「逃避」「反逆」という五つの適応類型が構成されるのであるが、彼の強調する点はこれらの類型が諸個人の性格類型ではないという点である。「かかる範疇は性格自体ではなく特定状況における役割適応 role adjustments に関するものである³⁷⁾。」つまり、ここでいわゆる「文化とパーソナリティ」論の問題構成の中から性格論が捨象され³⁸⁾、「特定状況」を生じさせる社会構造のもう一つの構成要素、すなわち制度的手段への接近のための機会（階級構造）が問題構成に取上げられることになる。

五つの適応類型はあらゆる社会に適用可能な役割行動類型とされているが、Merton の主要な関心の対象は、「アメリカ競争社会 our competitive society」における「商品やサービスの生産、交換、分配、消費」といった「広義の経済活動」にある³⁹⁾。そしてとりわけ、「改変」と

呼ばれる非行・犯罪等の反社会的行動に焦点があてられる。ここで第一段階で挙げられたアメリカ社会の特徴である「金銭的成功」という過度な文化的目標の強調とその達成のための制度的手段の配慮の軽視という文化構造上の不均衡に加えて、先にも触れたように制度的手段への接近のための機会が差別的 (differential) に存在しているという特徴、つまり階級構造が合わせて問題とされるのである。競争社会においては、一方では貨幣獲得という成功目標が文化的目標として階級構造のあらゆる階層に広範に浸透している。にもかかわらず、他方ではその目標達成のための制度的手段への接近機会は階層化されて差別的に分布している。こうして、目標達成へと刺戟されながらも制度的な機会を否定されている下層階級は非行・犯罪等の非制度的手段による目標達成へと駆り立てられる (called forth) ことになる。社会=文化構造における文化的要素 (目標=手段) と社会的要素 (手段への接近機会) との「構造的な不統一 structural inconsistency」の結果が病的性格、あるいはまた反社会的行動、あるいはまた革命的行動となってあらわれる⁴⁰⁾のである。「貧困」と「犯罪」の相関関係についても、「貧困」それ自体は独立変数ではなく、社会的文化的変数の複合の一つにすぎない。「貧困とそれにとまなう (あらゆる社会成員の認める文化的価値のための競争の場における) 不利な条件が、成功のシンボルとしての貨幣獲得の文化的強調と結びつくかぎりにおいて、反社会的行動が『正常な』結果となってあらわれるのである⁴¹⁾。」理論構成の第一段階で文化構造の二要素間の不均衡状態と定義されたアノミーは、ここで社会構造の側面、すなわち階層化された機会との関連において逸脱行動への圧力を生み出す社会的状況として新たに再定義されていると解することができる。

以上に見てきたように、Merton のアノミー論は、アメリカ競争社会における経済活動全般の場に働く社会的文化的圧力の複合 (金銭的成功目標、制度的手段、階層化された機会) を分析単位として展開された一種の葛藤理論と言うこともできよう。さて、同じアメリカ社会の人間的状况を「競争的生活状況 Competitive life situation⁴²⁾」として捉え、これに分析を加えたのが Horney の「文化と神経症」論文であり、その展開である『現代の神経症的人格』であった。

Horney によれば、「われわれは競争的・個人主義的文化の中に生存している。(中略) 競争は単に経済活動における推進力としてのみならず、われわれの個人生活のあらゆる面に浸透していることを銘記しなければならない。われわれのあらゆる人間関係の特質は多かれ少なかれ露骨な競争によって型取られている。それは家族の中の兄弟姉妹間で、学校で、社会関係で、そして愛情生活で著しい影響力を発揮しているのである⁴³⁾。」こうした状況を彼女は「競争的生活状況」と呼び、そこに典型的な神経症的葛藤の温床となる特定の矛盾が存在することを突きとめる。いわゆる「文化的葛藤」あるいは「文化的矛盾」である。彼女はこの矛盾を次のように三点にわたって指摘する。すなわち、「第一に挙げるべき矛盾は、一方において競争と成功が強調され、他方で同胞愛と謙虚さが強調されていることである⁴⁴⁾。」一方では手段が何であれ成功を達成することが崇拜され、単に自己主張的であるだけでなく、攻撃的で他人を押しよけることのできる人間であることが要求される。だが他方では、謙虚で非利己的で、時には自己犠牲的であることが社会的・宗教的美徳とされる。「この矛盾には、正常な範囲内では二つの解決しかない。第一は、これら二つの傾向のどちらか一つだけを信用し、他方を捨てることである。第二は、両方とも本気にすることだが、そうするとひどい制止が生じてどちらもできなくなる。」

「第二の矛盾は、われわれの要求が刺激されるにもかかわらず、現実にはそれらの要求を思うように満たせないという事実である。」個人の欲求は市場経済からの要請によって、常に広告や街示的消費や近所付き合い等によって刺戟されているが、それを実際に充足させる可能性はきわめて

少ない。「その結果、個人は自分の欲望とその満足との間のくい違いを、たえず感じることになる。」

「第三の矛盾は、個人の自由についての信念と、実際の限界との間に存在する。」社会は個人に対して、彼が自由で独立しており、自らの自由意志に従って人生を決定しうるのだ、効率的で精力的であれば欲するものは何でも獲得できる、と説く。にもかかわらず、現実にはほとんどの人間にとってこうした可能性は——たとえば職業選択と成功、娯楽の選択、配偶者の選択等——きわめて限られている。「その結果個人は、自分の人生を決定する無限の力を持っているという感情と、何一つできないという感情との間を揺れ動くことになる⁴⁶⁾。」

Horney は、これら三つの文化的矛盾によって惹き起こされる神経症的葛藤として、「攻撃傾向と屈辱傾向、過剰な要請と何一つ獲得しえないという恐れ、自己拡張への衝動と無力感⁴⁶⁾」を挙げる。そして、正常な人間と神経症的な人間との相違はその葛藤の程度の差にすぎないと述べている⁴⁷⁾。

私たちはここで、Horney の列举した三つの文化的矛盾を、Merton のアノミー論との比較において次のように整理することができよう。第一の矛盾は、「二重道徳 double moral⁴⁸⁾」とも呼ばれるものであるが、これは二つの文化的価値、すなわち成功価値と献身価値の間の葛藤と解しうる。この問題は、Merton のアノミー論の理論構成の第一段階の議論に対応するものと言えよう。Merton の成功目標という文化的価値は、Horney の挙げた二つの価値のうち一つのみを問題構成に取上げ、他の一つ、すなわち献身価値の問題を捨象したものに他ならない。ただし、彼の「文化的目標＝制度的手段」図式の中の制度的手段という語は、競争の場における道徳規範性の意味が（技術的手段と区別されて）所与の前提として含まれている。つづいて、Horney の第二、第三の文化的矛盾は、競争社会によって刺戟された欲望および肥大した自由の幻想と、その達成の可能性の現実的制約の問題である⁴⁹⁾。これはアノミー論の第二段階の議論に対応している。Horney のこの図式にはすでに、成功目標が社会のあらゆる階層に広範に浸透し、個人はその達成へと刺戟されながらも、現実にはその成功機会は階級構造によって制約されているという、Merton の社会＝文化構造間の不統合に関する分析図式を予期してはいないだろう。

以上のような考察はあまりにも牽強附会の議論にすぎないであろうか。たしかに Horney の第一の文化的矛盾は相反する二つの文化的価値が並立して葛藤しあう状態のことであり、これに対して、Merton のアノミーは一つの文化的価値に関する目標＝手段間の不接合状態の意味であった。換言すれば、二項対立の図式と目的＝手段図式とは決定的に異なる。また、Horney の『現代の神経症の人格』の論は、Merton が後にアノミー論修正論文（1949）で批判するように、「文化の不統一」に起因する「欲求不満の状態に反応する選択的様式の類型論」として、「たえず『文化』に関心を抱いているにもかかわらず、農民や労働者やビジネスマン、下流、中流、上流の各階級に属する人々、種々の民族集団の成員などに及ぼす文化の影響の相違を究明していない⁵⁰⁾。」この批判は正しい。たとえ、Merton の 1938 年のアノミー論文にも職業別、階層別、民族集団別の「文化の影響の相違の究明」は見当らないとしても、階級構造に規定された差別的な成功機会という概念にはすでにそれを解明するための分析枠組は用意されているからである。これに対して、Horney の分析枠組には、たとえば「正党と異常」の判断基準について「その基準は文化により時代により、社会階層により性別によって異なる⁵¹⁾」と言及されていても、「社会階層」あるいは「階級構造」の問題への分析視角はやはり見受けられない。

にもかかわらず私は、Horney の「文化と神経症」論と Merton の「社会構造とアノミー」

論との間に、Merton 自身が述べる Durkheim, Sorokin, Parsons から彼へといたる理論的継承関係以上に重要な関係を見出すのである。私は第二節で、逸脱原因論についての Freud 的見解に対する批判において、Horney と Merton の基礎視角が一種の社会的状況因論として同一であることを論じた。つづいて本節の前半で、Merton の「個人的適応様式の類型論」が「性格論」ではなく、成功機会が階層化された「特定状況」における役割適応の類型論であり、その分析図式は「文化とパーソナリティ」論の中から性格論を捨象したものであると述べた。ここで、Horney と Merton それぞれの理論の認識図式を次のように図式的に整理することが可能であろう。前者は「競争社会」における「文化と神経症」の問題を「＜文化的矛盾＞—＜状況＞—＜性格構造＞⁵²⁾」という三項からなる関係図式によって、後者は同じ「競争社会」における「社会構造と逸脱」の問題を「＜文化的混沌＞—＜状況＞—＜階級構造＞⁵³⁾」という三項図式によって解明しようとしたのである。つまり、Merton は Horney の文化的矛盾という二項対立図式を社会＝文化構造の構成要素に解体し、目的＝手段図式の導入によって再編成するとともに、性格構造概念に替えて階級構造概念を社会構造的側面として取り入れたとすることができる⁵⁴⁾。

しかしながら、ともにアメリカ競争社会の人間の状況を問題にしているとしても、Horney の図式の＜状況＞が「競争的生活状況」と呼ばれ、日常の人間関係のレベルで扱われているのに対して、Merton のそれは経済活動に限定された社会的状況を意味している。とすれば、こうした問題領域の相違が意味することは、たとえ二人の理論が時を経ずして現われ、その認識図式の類似性はともかくとしても、そもそも両者がまったく別の場所からそれぞれ独立に理論を展開したということではないか。そうかもしれない。時代は知性に運命をもたらし、その認識に枠組を課すというのはほんとうかもしれない。だが、私はむしろ、この問題領域の相違にこそ Horney から Merton への呼応関係を見出すのである。Horney は「文化と神経症」の中で次のように述べている。「われわれの文化の経済的・技術的達成が競争原理に基づいてのみ可能であるか否かは経済学者や社会学者が決定する問題である⁵⁵⁾。」と。Merton はこのような問題提起に応えるために「社会構造とアノミー」論文を経済活動レベルに限定して論じたのではなかっただろうか。上記の引用につづいて、Horney は次のように語っている。「しかし、心理学者はわれわれがそれに支払ってきた私的代価を算定することはできる⁵⁶⁾。」私的代価、すなわち神経症の病因は結局のところ競争社会自体にあると暗に彼女はアメリカ社会を断罪する。競争社会についてのこの悲観的見解に対して、次のように答えることこそ Merton のアノミー論の背後にあった真の意図ではなかっただろうか——問題は競争社会それ自体にあるのではなく、病める社会の競争性の問題である、と。そしてそのことによって、彼は1930年代後半アメリカ社会学が当時置かれていた知的状況に対して一つの異議を唱えたのではなかっただろうか。

ここから、この小論に残された最後の考察課題、Merton のアノミー論の背後にある基本仮説に照準を定め、彼の社会秩序観の解明がなされなければならない。

4. ＜競争的秩序＞の意味するもの

ところで「社会構造とアノミー」論文に「競争」という語が最初に登場するのはどのような文脈においてであろうか。Merton がアメリカ社会を金銭的成功を志向目標とする競争社会として捉え、そのアノミー状況の分析をおこなうに先立って、三つの社会（集団）の理念型をカテゴリー化していること、その第一類型にアメリカ社会を分類していることはすでに前節の初めに述べた通りである。それでは、第二の類型に分類される社会はいかなる社会であろうか。Merton は

この類型の特徴として、当初手段とみなされた活動が目的それ自体に変じていること、制度的に規定された行動への儀礼主義的固執が脅迫的となっていること、行動の選択範囲がきわめて狭いこと等を挙げ、このような社会を「伝統に拘束され、新奇恐怖症 neophobia によって特徴づけられた聖なる社会 sacred society⁵⁷⁾」であると述べる。この類型の典型として、いわゆる伝統社会⁵⁸⁾あるいは未開社会が想定されているであろうことは明らかである。留意すべき点は、Merton の概念図式においてアノミーに対しては儀礼主義 (ritualism) が対立概念としてみなされていることである⁵⁹⁾。このことは、彼が近代社会と伝統社会のいずれの社会をも異常な社会状態とみなしているということを意味していよう。だが、果してそうであろうか。

たしかに、Merton は第一と第二の類型の中間に、文化的目標と制度的手段の平衡が維持される社会 (集団) 類型を想定している。この型は構造的に統合され、安定しているとともに変化をも許容する社会 (集団) とみなされており、これによって Merton が理想とする社会秩序の形態が提示されることになる。ここでは、文化構造の二つの構成要素の均衡成立条件を述べた個所を直接引用すべきであろう。

「社会構造の二側面 (文化的目標と制度的手段—引用者注) の間の 効果的な均衡が維持されるのは、その二つの拘束に同調する諸個人に満足がもたらされる限りにおいて、すなわち、目標の達成からの満足とともに、その目標達成のための制度的に定められた様式からの直接的な満足が得られる限りにおいてである。かかる均衡が成立する場合、成功は二重である。成功は所産と過程との関連で、結果と活動との関連でそれぞれ相まって考慮されるものである。もしも競争的秩序 competitive order それ自体が存続すべきであるとすれば、自分の競争相手を凌駕することはもとより、かかる秩序への参加 participation 自体から不断の満足が得られていなければならない。制度的行動にしばしばともなう犠牲は社会的報酬によって償われなければならない。競争による地位と役割の分配は、役割への同調および地位にともなう義務の遵守を促す積極的刺戟がこの分配的秩序 distributive order 内のすべての地位 position に対して配備されるように組織されていなければならないのである⁶⁰⁾。」

私たちが「競争」という語に初めて出会うのはこの〈競争的秩序〉という観念においてである。(これは後の修正論文においてもいささかも変りはない。) このことは、Merton の理想とする社会秩序の観念が、暗に彼の示唆するように近代社会と伝統社会の中間ではなく、近代社会自体から抽象されたものであることを告げている。

それでは彼の〈競争的秩序〉なる観念はいかなる論理構造を有したものであろうか。一般に、競争が成立する条件は、第一にその志向目標が物質的財貨であれ、名誉・威信等の精神的価値であれ、あるいはまた才能・能力の表現であれ有限かつ稀少であること、第二にその目標が競争者間に共有価値として内面化されていること、そして第三に目標獲得のための規則が競争者間に共有価値として内面化されていること、以上である。これらの条件のうち、第二、第三の条件が Merton の文化的目標 (成功目標) と制度的手段に相当することは言うまでもない。だが、第一の条件すなわち志向目標の有限性と稀少性は競争を刺戟する条件ではあっても、それを秩序正しく持続させる条件ではない。また、一回限りのゲームではない社会生活の秩序形態として〈競争的秩序〉が成立するためには、第三の条件である目標獲得のための規則以外の何かが存在していなければならない。Merton が競争者の心理的観点から「(競争的) 秩序への参加自体から不断の満足が得られていなければならない」と述べるゆえんである。この点に彼の基本仮説の要諦があることは疑いない。彼は、〈競争的秩序〉が〈分配的秩序〉であることを示唆しているが、彼

の言う「競争による地位と役割の分配」の意味は、競争者の能力によって地位と役割の序列が決定されるということであろう。さらにまた、「分配的秩序内のすべての地位」に対して「役割への同調および地位にともなう義務の遵守を促す積極的刺戟」が必要であると、彼は語っている。この「積極的刺戟」が「秩序への参加自体からの不断の満足」に対応するものであろうことは明らかだが、それがいかなるものか、彼は直接詳らかにしていない。だが、別の個所で「競争システムを支える感情、すなわち競争相手の凌駕の可能性と、したがって他人の好意的な反応の享受とから生じる感情が全活動領域にわたって分配され、（成功という）究極的結果だけに限られていないかぎり手段の選択は制度的統制の範囲内でおこなわれるであろう⁶¹⁾」と述べていることから、「競争システムを支える感情」を生じさせる「競争相手の凌駕の可能性」と「他人の好意的な反応」が「積極的刺戟」に相当することは明らかであろう。まず、「競争相手の凌駕の可能性」が志向目標の獲得すなわち競争による報酬の可能性を指し、次に「他人の好意的な反応」がそれに付随する威信を指すものと考えられよう。「積極的刺戟」が「分配的秩序内のすべての地位」に「配備」されていなければならないということは、結局、競争の第一の条件、すなわち志向目標の有限性と稀少性という条件によって報酬と威信が各地位に差別的に配分されるということの意味するだろう。すなわち、競争者の能力の程度に応じて地位の序列が決定され、その序列を基準にして決定される報酬と威信の差別的配分によるメリトクラティックな階層秩序——これが Merton の＜競争的秩序＞という観念であろう。したがって、この社会秩序観から彼の階級構造の観念を抜き出すならば、それは生産手段の所有関係を決定因とする階級概念ではなく、競争能力に基づく報酬と威信の階層的序列を意味することになろう⁶²⁾。

彼はおそらくこの社会秩序観を他ならぬ Durkheim から継承しよう。『自殺論』の中で、Durkheim は、歴史の各時期には社会的職務の相対的な価値と報酬と生活程度が「社会の道徳意識の中にある漠然とした感情」によって序列づけられていると述べたしばらく後で、次のように語っている。「もしも相続が廃止され、各人が等しい努力で生活を始め、競争者どうしの競争がまったく平等な条件のもとで行なわれるならば、だれひとりとしてそこに不正な結果を見いだすことはなくなるであろう。そして事態が理想的状態にあることを、おのずからすべての者が感ずるにちがいない。実際、この理想的な平等状態に近づくにしたがってそれだけ社会的拘束の必要性が弱まるであろうということは疑いをいれない⁶³⁾。」

Durkheim の言う財産相続制度の存廃を不問に付せば（事実 Merton はこれを問題としないう）、彼の＜競争的秩序＞なる観念がかかる理想状態を志向するものであることは疑問の余地がなかろう⁶⁴⁾。＜競争的秩序＞は競争の結果において報酬と威信の不平等な階級構造を成立させるが、競争の出発点において競争者全員が競争機会を平等に与えられていなければならない。これが Merton のアノミー論の根底にある基本仮説である。

それでは、Merton はアメリカ競争社会の病理性を、すなわち逸脱行動への圧力を生み出すアノミーの原因をいかなる側面に見出し、いかなる解決策を提示していたのだろうか。前節で述べたように、彼は金銭的成功目標とその制度的手段、そして差別的な機会という三つの側面にアノミー状況の構成要素を看た。彼は自ら明言する通り、道徳的側面で問題を捉えない。このことは制度的手段について倫理的判断を下さないということの意味する⁶⁵⁾。そこで彼にとって問題は、金銭的成功という文化的目標と階級構造によって差別的に分布した成功機会との二側面となる。

まず、金銭的成功の問題については、Merton にとって文化的目標が成功目標以外を意味しないことは、＜競争的秩序＞を理想的な社会状態とみなす彼の基本仮説から明らかである。そこで、

彼は金銭的成功が成功目標として過度に強調されていることがアノミーの原因であると診断を下すが、その処方箋は成功目標という文化的価値の選択肢の中にのみ存在することになる。1949年の修正論文で彼が次のように述べるのはすなわちこの論理的帰結を語るものである。「共同的価値の在庫目録のなかには、これ（金銭的成功）に代るべき選択的目標がある。たとえば学問上、芸術上の業績の領域では、たいして金銭的報酬を伴わない他の成功型がみられる。文化構造がこのような金銭的成功以外の選択的目標を尊重し、社会構造がこの目標に近づくことを可能とするにつれて、この体制は多少とも安定化する。⁶⁶⁾」しかし、この問題は道徳的判断を含まぬとしても少なくとも価値判断の問題である。Merton がこの文化的目標の改革について寡黙であるのは機能主義社会学者のリゴリズムであろうか。

さて、もう一つのアノミー原因である階級構造の問題である。彼は、「開放的階級イデオロギー⁶⁷⁾」および「平等主義イデオロギー⁶⁸⁾」が rigid な階級構造に照らして幻想であることを指摘しているが、これが Marxist 社会学者のいわゆる虚偽意識の告発でないことは言うまでもない。むしろ彼の社会秩序観から演繹して考えるなら、彼はそのイデオロギーの信奉者であろう。Merton のアノミー問題の処方箋、したがって社会的逸脱の解決策は、成功機会の不平等の改革という点にのみある。メリトクラティックな階級構造に基づく報酬と威信の不平等、すなわち〈結果の不平等〉は所与の前提とみなされ、〈機会の不平等〉のみが中心的課題となるのである。アノミー論の真の帰結はこの点にある。1957年の「社会構造とアノミー(続)」論文の最終節「社会構造の変化と逸脱行動」で、彼が社会構造の変化として強調するのは「機会を生み出す構造」の変化である⁶⁹⁾。この微妙なニュアンスの用語法こそ、Merton のリベラリストとしての姿勢を十分にものがたるものである。事実彼は、その節の終りで次のように語っている。「改革者の直接的攻撃よりも以上に、政治的ボス組織の力を大いに弱めたのは『社会保障』の制度と多少とも官僚的に施行された奨学金制度の発達であるといえ、比喩的ないい方だとしても、本質的には当を得ている⁷⁰⁾。」これが Merton のアノミー論の彼自ら語る最終的結論である。だとすれば、私はこの小節を次のように結ばなければならないであろう。現存する社会構造の存立原理（私有財産制と相続制⁷¹⁾）自体を不問に付し、〈競争的秩序〉という虚構を他ならぬ私たちの経験的世界の中に幻視し、それを基準に社会の改良度を測定しようとする——それが Merton のアノミー論の仕掛けであり、また目的であった、と。

結 び

1930年代後半の時代状況の中で、Merton のアノミー論はいわば早生の社会学理論であった。アメリカ1930年代後半の、そして第二次大戦へといたる歴史的現実には、競争原理の確立を唱導する理論を求めず、協同原理の確立に寄与する個別実践的な理論を要求していた。競争いや闘争の原理は、すでに外に向って確立されつつあった。台頭するファシズムに対する民主主義の擁護、それが闘争の獲得目標であった。戦時体制への協力の要請の下に、社会学者、文化人類学者、精神医学者は1930年代に築いた方法と知識を携えてともに戦場へと自らすすんで行ったのである。

アノミー論が Merton 自身の手で、また多数の後継者達によって理論上の修正を施され、アノミー状況の、すなわち競争的秩序の崩壊地帯の社会地誌を作図すべく数多くの経験的調査が実施されるのは、1950年代後半以降、とりわけ60年代にいたってからのことである⁷²⁾。この時期は、アメリカ自由主義的社会学者と自由主義的政策立案者による福祉国家政策の計画と実施の時期に当たる。正規初・中等教育の拡充、国家補助による高等教育の拡大、補助教育、職業訓練計画等の教育政策、人種的・宗教的・階級的・性的差別廃止を旨とする社会政策、社会保障等々、これらの社会改良政策に共通する目標はまさしく経済的成功のための〈機会の平等化〉という一点にあった⁷³⁾。実にこの点において、アノミー論の隆盛は自由主義的社会改革運動と軌を一にしていたのである。

Merton のアノミー論、とりわけ著名な個人的適応様式の五類型の現実的有効性あるいはリアリティは、

精神病・ノイローゼ・麻薬常習・非行・犯罪等々の社会問題に対して個別具体的に実践活動をおこなう人々、精神科医、ソーシャル・ワーカー、カウンセラー等にとって何の意味も持たないことは言うまでもない。それでは、彼の理論のリアリティはどこにその裏付けが存在するのであろうか。おそらく、私たちが現在生きている社会的世界には、いわば《リアリティのヒエラルキー》と呼ぶべき構造が存在している。その最深層は社会的リアリティが破碎し、私たちの内的リアリティばかりが繁茂する領域であるとするれば、その最上層は私たちの生活世界のリアリティが漂白され無機質化された領域であると言えよう。この後者の領域によってのみ保証される、いわば社会工学的リアリティ——それが Merton のアノミー論の持つ唯一のリアリティである。

神経症の性格の窮極原因を競争社会の文化的矛盾に看た Horney は、しかし、それを二項対立図式に固定化して捉えたがゆえに「競争的生活状況」という二重拘束状況への凝視に耐えられず、やがてそれに煩わされることのない成熟した人格の完成を唱導することによって理論を自閉させ、社会的リアリティを喪失した道学者へと墮してゆく。それが Fromm を含めて Neo Freudians の辿った道であった。彼らに対して、Merton は、その思想を「善意に基づくアナキズム⁷⁴⁾」と名づけるが、＜競争的秩序＞なる虚構を私たちの社会的世界の中に幻視する、おそらくその本質において17世紀風モラリストであろう彼もまた、その幻想性においてリアリティの喪失の度合いは彼らと同等だと言わねばならないだろう。

註

- 1) R. K. Merton ; "Social Structure and Anomie" in A.S.R., vol. III no. 3, 1938, pp. 672~682.
(以下 SS & A-Thery と略)
- 2) R. E. Park & E. W. Burgess; Introduction to the Science of Sociology, 1921.
- 3) P. A. Sorokin; Contemporary Sociological Theories, 1928.
- 4) E. Mayo; The Human Problems of an Industrial Civilization, 1933.
- 5) R. K. Merton ; "Anomie, Anomia, and Social Interacion" in M. B. Clinard (ed.): Anomie and Deviant Behavior, 1964. p. 215. (傍点引用者)
- 6) T. Parsons ; The Structure of Social Action, 1937, Chap. 2.
- 7) R. K. Merton (with P. A. Sorokin); "Social Time : A Methodological and Functional Analysis" in A. J. S., vol. 42, pp. 615~629.
- 8) E. Durkheim; De la division du travail social, 1893.
- 9) —————; Le suicide, 1897.
- 10) 真田 是; 『現代社会学と社会問題』1965, p. 85.
- 11) W. Simon & J. H. Gagnon; "The Anomie of Affluence," in A. J. S., vol. 82, p. 357.
- 12) かかるアノミー論批判が至当であるか否かは、本論特に最終節がおのずから明らかにしよう。
- 13) W. Simon & J. H. Gagnon; op. cit., p. 357, 論者達によれば、Merton らの世代の社会学者にとって「経済的繁栄が不況以上に“正常な事態”を混乱させ断絶させる世界」が「稀少性の社会」としてイメージされているという。
- 14) この間の事情を A. Gouldner はその Parsons 批判の書で次のようにアイロニカルに語っている。「1930年代の危機は T. Parsons とその弟子達にあまり職業上の誘因をもたらさなかったし、その危機の直接的研究に彼らをかりたて、そのことによって理論構築から解き放つことができるほどの財政的基盤を与えはしなかった。」A. W. Gouldner; Coming Crisis of Western Sociology, 1970, 同訳書。矢沢修次郎他訳『社会学の再生を求めて (I)』1975, p. 204.
- 15) 『アメリカ社会学雑誌』(AJS) は 1937年5月に「社会科学と精神医学」を特集している。See A.J.S., vol. 42, no. 6, 1937, pp. 773~894. なお, Social Psychiatry と Socioanalysis については, H. S. Sullivan; "Socio-Psychiatric Research" in Am. J. of Psychiatry, 1933. R. Bain ; "Sociology and Psychoanalysis" in A.S.R., vol. 1, no. 2, 1936, pp. 203~220.
- 16) 祖父江孝男『文化とパーソナリティ』1976. 第一編参照. pp. 1~148.
- 17) K. Woodroffe; From Charity to Social Work, 1962. 熊倉伸宏他「社会学的積極主義の台頭」『精神医療』vol. 3, no. 3, 1974, pp. 66~78 よりの引用。
- 18) G. L. Coyle; "New Trends in Group Work" (1939) in K. Woodroffe; op .cit., 前掲誌よりの引用,

- p. 71.
- 19) 宇賀博はこの間の事情を E. Mayo を中心に「社会学的ロマン主義」による「第一次集団の再発見」として学説史的に捉えている。同著書『社会学的ロマン主義』1971. 第5章. pp. 128~136.
- 20) 祖父江孝男；前掲書参照。
- 21) E. Sapir ; “Cultural Anthropology and Psychiatry,” in J. of Abnormal and Social Psychology, 1932. 同訳「文化人類学と精神分析」『現代思想』vol. 4~5, no. 5, 1976, pp. 144~167.
- 22) M. A. May ; “A Research Note on Co-operative and Competitive Behavior” in A. J. S. vol. 42, no. 6, pp. 887~891. John Dollard; Criteria for the Life History, 1936. M. Mead (ed.); Cooperation and Competition among Primitive Peoples, 1937.
- 23) 山根常男；「社会学と精神分析」『社会学評論』第9巻第4号. 1959, p. 3.
- 24) R. K. Merton; SS & A-Theory” in A.S.R (1938) p. 672.
- 25) H. Marcuse; Eros and Civilization, 1956.
- 26) R. K. Merton; op. cit., p. 672.
- 27) Ibid. p. 682. See note 21.
- 28) R. K. Merton; “SS & A-Theory” in Social Theory and Social Structure, 1948, rev. ed. 1957. 同訳書 森東吾他訳『社会理論と社会構造』1961, p. 130.
- 29) K. Horney; “Culture and Neurosis” in A.S.R. vol. 1, no. 2, pp. 221~222.
- 30) Ibid., pp. 229~230. (傍点引用者)
- 31) K. Horney ; The Neurotic Personality of Our Time, 1937, p. 288, 同訳書. 我妻洋訳『現代の神経症の人格』1973, p. 272.
- 32) P. K. Merton; “SS & A-Theory” in A.S.R. (1938) p. 682.
- 33) ただし, Merton は 次の論文では性格論を扱っている。 “Bureaucratic Structure and Personality” 前掲訳書所収。 「ビュロクラシーと性格構造」参照。
- 34) K. Horney. op. cit., p. 287.
- 35) R. K. Merton ; op. cit., pp. 673~674. この類型についての論議は後の修正論文で払拭されるが, Merton の論理展開が帰結するところはいささかの変化もない。注 (59) 参照のこと。
- 36) Ibid., p. 675. See note 8.
- 37) Ibid., p. 676.
- 38) Ibid., p. 676. note 11. Sapir についての注記を参照のこと。
- 39) Ibid., pp. 676~677.
- 40) Ibid., p. 679.
- 41) Ibid., p. 681.
- 42) K. Horney; “Culture and Neurosis” in A. S. R., p. 229.
- 43) Ibid., p. 227.
- 44) 45) 46) 47) K. Horney; op. cit., p. 288 f. 同訳書 pp. 272~274.
- 48) K. Horney; “Culture and Neurosis” in A. S. R., p. 228.
- 49) ここで, 第一の文化的矛盾に「価値体系の崩壊」もしくは「信念体系の葛藤」(S. DeGrazia) というアノミーの社会心理学的定義を, あるいはまた第二, 第三の文化的矛盾によって生じる神経症的葛藤に「欲望の無規制状態」「無規制的な意識の中で生じる無限なものを目ざす情念」(Durkheim) あるいは「生の無意味感」(L. Srole) というアノミー概念との類似性を見出すことができる。 Cf. S. DeGrazia; The Political Community, 1948, pp. 72~74. E. Durkheim; op. cit. 同訳書. 宮島喬訳『自殺論』1968, p. 216. L. Srole ; “Social Integration and Certain Colloraries,” in A. S. R., vol. XXI, 1956, pp. 709~716.
- 50) R. K. Merton; “SS & A-Theory,” in 1949. 前掲訳書. p. 129 f. 注 12, 参照。
- 51) K. Horney; The Neurotic Personality of Our Time, 1937, P. 18. 同訳書 p. 5.
- 52) Horney の性格論については, 性格構造の基底として「安全追求」と「満足追求」という二つの欲動が仮定されていることを指摘するにとどめる。前掲訳書. p. 276 参照。
- 53) Merton の階級構造概念については第4節で詳述する。

- 54) 三項図式のうち第三項が「性格構造」であるがゆえに、Horney の状況分析には一社会内の下位集団別（職業別，階層別，民族集団別）の「文化の影響の相違の究明」が欠落するのである。この三項図式の性格構造の項と階級構造の項とを合わせて四項図式の状況分析図式を，さらにまた，下位集団概念をこれに加えて多項図式を作製することも可能であろう。Merton (1940) の「ビュロクラシーと性格構造」論，あるいは E. Fromm (1941) の「社会的性格」論は基本的にこのような認識図式を基礎としている。また R. Cloward (1959) による「差別的機会構造」概念の導入によるアノミー論修正は Merton 図式の第三項を分節化したものと考えられる。Cf. E. Fromm; *Escape from Freedom*, 1941. R. K. Merton; *op. cit.* 前掲訳書. R. A. Cloward; “Illegitimate Means, Anomie, and Deviant Behavior,” in A. S. R., vol. XXIV, no. 2, 1959, pp. 164~189.
- 55) 56) K. Horney; “Culture and Neurosis,” in A.S.R., 1936, p. 227. また前掲訳書. p. 272 参照。
- 57) R. K. Merton; “SS & A-Theory” in A. S. R. (1938), p. 675.
- 58) Ibid., p. 677. note 13 を参照。
- 59) Ibid., p. 675. note 7 を参照。かかる社会（集団）類型論は，後のアノミー論修正論文（1949）で払拭されるが，その基礎的な認識構造にはいささかの变化もない。Merton は第二の社会類型の特色として「当初手段とみなされた活動が目的それ自体に変わっていること」という点を挙げているが，この手段の目的への転化こそ，成功目標（金銭的成功であれ他の何であれ）が文化的目標とみなされる近代社会の属性であろう。また ritualism の訳語を従来通り「儀礼主義」としたが，本来は「虚礼主義」とでも訳すべきであろう。
- 60) R. K. Merton; *op. cit.*, p. 674. (傍点著者)
- 61) Ibid., p. 681f.
- 62) Merton の＜競争的秩序＞観は，K. Davis と W. Moore (1945) による社会成層論の「差別的報酬の決定因」を「地位の機能上の差別的的重要性」と「人員（能力と訓練）の差別的稀少性」に位置づけるメリトクラティックな「開放的階級構造」概念を予見するものである。K. Davis & W. Moore; “Some Principles of Stratification,” in A. S. R., vol. X, no. 2, 1945, pp. 242~249.
- 63) E. Durkheim; *op. cit.*, 前掲訳書 pp. 206~209.
- 64) Ibid., p. 209. 参照。ただし，Durkheim はこうした＜競争的秩序＞に対して懐疑的である。本文の引用につづく個所を以下に引用しよう。「しかし，それも程度の問題にすぎない。なぜなら，いつになってもある種の遺伝は存続するにちがいないからである。すなわち，生来の才能の遺伝がそれだ。知性，趣味，科学的・芸術的・文学的・工芸的才能，勇気，器用さ——それらは，われわれ個人の生まれつき与えられているものであって，ちょうど生まれながらの資産家に資本が与えられ，また貴族に称号や職分が与えられているのと同じである。したがって，この自然の恩恵に恵まれなかった人々に，出生の偶然のめぐりあわせに由来する劣った地位を甘受させる，ある種の道徳的規律もまた必要であろう。」これは現代のメリトクラシー論への暗鬱な批判となっていよう。
- 65) R. K. Merton; *op. cit.*, p. 682, 彼の＜競争的秩序＞という観念に対する信仰が制度的手段という職業倫理の問題を無視させているといった方がより正確であろう。前記注(64)と対照のこと。なお，この問題への言及については次の論文を参照のこと。作田啓一；「アノミーの概念(1954)」『価値の社会学』所収。1972, pp. 193~220.
- 66) ———— ; “SS & A-Theory” in 1949, 前掲訳書. p. 146.
- 67) ———— ; “SS & A-Theory” in 1938, p. 679.
- 68) Ibid., p. 680.
- 69) ———— ; “SS & A-Theory” in 1957, 前掲訳書 p. 177 f.
- 70) Ibid., 前掲訳書 p. 178.
- 71) A. Gouldner はアノミーを私有財産制と相続制との関係において捉えている。A. Gouldner; *op. cit.*, 前掲訳書 (Ⅲ) p. 219ff. esp. p. 221.
- 72) M. B. Clinard (ed.); *Anomie and Deviant Behavior*. 1964, pp. 246~311. S. Cole と H. Zuckerman によるアノミー論の理論研究と調査研究のクロニクルおよび要約を参照のこと。
- 73) S. Bowles と H. Gintis によれば，60年代の自由主義的社会改革者の失敗の後，70年代には保守主義者からの反動が巻き起っているという。経済的不平等の原因として個人の遺伝的な認識特性 (IQ) が決

定因であるとする「IQ イデオロギー」の登場である。論者達は、IQ と経済的成功との因果関係は存在せず、家族的背景によって世代間に伝達される社会階級的要因が経済的成功の原因であることを統計的データの解析によって証明し、IQ イデオロギーの虚偽意識性を告発している。だが、遺伝説であれ、環境説であれ、IQ が経済的不成功の要因でないことは証明されず、おそらくIQ を中心とする能力主義イデオロギーは蔓延の一途を辿るであろう。そして、アノミー論は、自由主義・保守主義であれ、あるいは社会主義であれ、行政官僚機構が聳立するかぎり、今後も＜競争的秩序＞の崩壊地帯という幻想的社会地誌を作製すべく自己増殖を続けるだろう。S. Bowles & H. Gintis; “IQ in US Class Structure.” 青木昌彦編訳『ラディカル・エコノミックス』所収。1973, pp. 221~288. Cf. J. S. Coleman, et al; Equality of Educational Opportunity, 1966. R. Parker; The Myth of the Middle Class, 1972.

74) R. K. Merton; Social Theory and Social Structure, rev. ed. 1957. 前掲訳書. p. 112.

本論文は1976年1月「全国精神医療研究会」（於京都）でおこなわれた中村由美子氏による「K. Horney の『精神分析の新しい道』について」の発表、およびその後の討論の過程で生まれたものである。Horney と Merton という踏まざるべき二つの轍についてのこの小考を、感謝の言葉とともに、若き精神科医達に贈る。

(本学部助手)